

ライマン雑記 (7)

副見 恭子¹⁾

J. P. レスリー (II)

ライマンがヨーロッパ留学中伯父レスリーに送った手紙はたった7通しかない。パリから、ドイツ、ザクセンにあるフライベルクの鉱山学校へ向う時書いた1861年4月11日の手紙が最後である。その後1年半余りのブランクがあり、次の1862年9月19日付の手紙は、青天のへきれきと云うべきか、発信地はライマンの故郷ノースハンプトンとなっている。この日付の手紙は2通存在する。内容は同じであるが書き方に差異が認められる。ライマンは長い無沙汰を詫びると同時に、仕事の依頼をどう書いたらよいか苦悩したらしい。私は、2通の手紙が一緒にスクラップブックに貼られているのに疑問を抱いた。ピーター・レスリー没後、レスリー家より返却された手紙に、ライマンが送らなかった手紙を加えたと解したらよいのだろうか? “My dear Uncle” の敬辞で始まる第1の手紙(貼付順)は、無沙汰の詫びと「戦争(南北戦争1861—1865 著者注)のニュースを聞き帰心矢の如し……」と弁明しているが、“My dear Mr. Lesley” とした第2の手紙は単刀直入就職の依頼で、2通共当時軍隊に入るべきかどうか悩んだが、結局民間の仕事の方が自分に向いていると考えた後書いたものと思われる。どちらの手紙をレスリーに送ったかは、全くのあて推量の外はないが、寛大な伯父は、どっちの手紙を受け取ったとしても、ライマンの帰国を心より歓迎し、祝福に満ちた返事を送ったに違いない。帰国後3ヶ月足らずの11月8日、ペンシルバニアのポッツビル(Pottsville)よりライマンが伯父へ地質測量報告第一便を送っているところから判断すると、帰国後の出だしは好調だったと言えよう。ライマンは翌年フィラデルフィアに事務所を開いた。1872年の末、日本に赴くまで、レスリーとの関係は公私共益

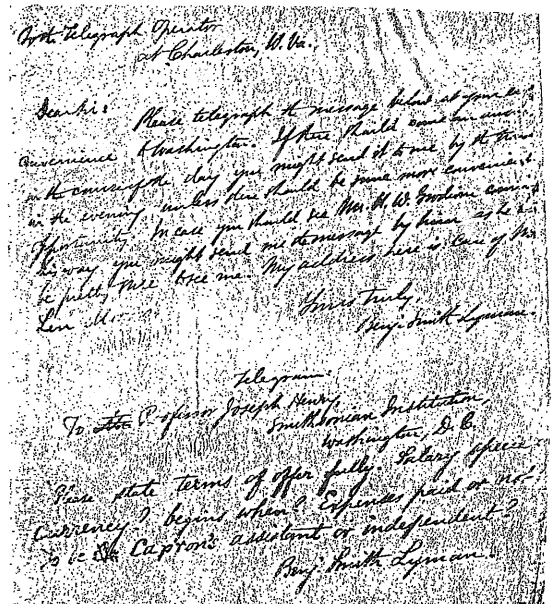
々深まっていった。

日本からレスリーにあてて書いた手紙は、正しく書簡中の圧巻である。しかし或時はやきもきし、或時は「マニフェスト デスティニー(自明の運命)」とワシントンからの日本行きの返事を平然と待つライマンの手紙も一読に価する。

ウエスト バージニア
5月21日 1872

My dear Mr. Lesley,

——日本の契約条項を読んで、1, 2時間程混乱しましたし、また多くの計算間違いをしました。最初これでは行けないと思いましたが、夜近くなってこの案に満足するようになり、断ってはならないとさえ思い始めました。しかしあなたが言及しなかった問題点があったので、私は今朝の汽車



第1図 ライマンが Prof. ヘンリーへ送った電報。
original も斜めに書かれている。

1) マサチューセッツ大学顧問：
8 Eaton Court, Amherst MA 01002, U. S. A.

キーワード：ライマン・J. P. レスリー

で、ヘンリー教授宛の電報をチャールストン(10マイル)へ送りました。給料は正貨で払うのか、通貨で払うのか？ 何時払ってくれるのか？ (即ち出発前か、到着後か？) 諸出費は支払ってくれるのか？ (あなたは、私が旅費を出すのだと言われましたが、このけちな条件は全く納得できません。) さらに私はケプロンの助手なのか、独立しているのか、これ等の条件について問合せました。私はアンチセルと日本政府の様ないざこざを起こすことより、ケプロンとうまくいかないのを心配しますが、これは受諾するかしないかの決定的な条件ではありません。給料は去年と同じ様に低いと思いますが、もし給料が正貨で払われ、契約期間の費用を負担してくれるなら、去年よりいくらか良い条件です。(以下略)。

次の新しいパラグラフは、後日書いたものとみえて、返事を待ちあぐむライマンの焦燥が伝わってくる。

今日はまだヘンリー教授から返事が来ません。彼は郵便で返事を送ったのか、または留守なのか、それとも明日来るのでしょうか？ あなたがフレイザー(Frazer)にこの件を話したので、彼はこの仕事を得たいと熱望しているかもしれません。この仕事は彼の手から強いて奪いとるほどの価値はないのです。ただ彼の場合、若い妻と教授職があるので、国を離れるより留る方を選ぶと思います。彼は自国での確実な前途があるのですから、新しい仕事を始めるのは愚かです。私の場合は、彼よりもずっとこの仕事にふさわしいと思います。新しい分野を研究するチャンス、唯一のチャンスです。仕事の将来性の点では、多分マイナスよりプラスになります。ここでのビジネスコネクションは断たれますが、将来ビジネスへの道を開く場合、箔が付くのではないのでしょうか？ (以下略)

6月に入っても、ワシントンから開拓使の件について何ら音沙汰がないので、ライマンが伯父へ送った手紙は、悲観的である。しかし「アメリカに留まっても全く満足です」と言った下から、自分の思うような仕事の条件だったら、やはり日本へ行きたい、新しい国で張り切って仕事をしたいと、再び情熱を燃やすのであった。7月になると交渉に入ったようで、「日本行きは天命であるらしい」と積極的

姿勢に転じた。またライマンは、高給を約束する、大規模なイエローストーン遠征隊参加の申し出を断っているのだから、この時点で開拓使の採用を確信したに違いない。交渉は着々と進み、ライマンの職掌は明確となり、要求条件は受け入れられ、1872年10月25日、ついに森有礼在米少弁務使と仮契約を結んだ。7月以来レスリー夫妻との文通は途絶えていたが、12月17日、日本へ向かう汽船アラスカ号を待つサンフランシスコのホテルから、5ヶ月ぶりに、依頼及び近況を告げる手紙をしたためた。

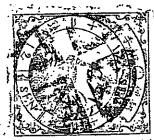
ライマンがレスリーに長い手紙を日本から送ったのは困難な蝦夷地質測量調査が終わり、開拓使との絶えざる紛争からやっと開放され、さらに新しい仕事で前途がバラ色になった1876年の初めであった。ハイライトと思うところを抜粋する。

浄運院 大門 芝 江戸
2月11日 1876

My dear. Mr. Lesley,

——驚いたことには、12月日本政府から本州油田調査のため、内務省で2年働いてくれとの話しがありました(内務省は開拓使よりずっと上級の役所で、長官は政府で3,4番の地位にあります)。油田は全く新しいものですが、インドのパンジャブ油田よりは産出が多いと思います。契約するところまで漕ぎつけました。私は恐らくここに留るでしょう。私は、我々の地質調査法を日本に確立するため、12人の日本人の弟子達一皆すばらしい人々です—をもっと仕込もうと思っています。新しい契約では、私と役人との関係は過

PROF. J. P. LESLEY,
No. 1008 CLINTON ST.
PHILADELPHIA,
PENNA.
UNITED STATES
OF AMERICA



7 PRINTED MAPS.

第2図 ライマンがレスリーへ書いた手紙の封筒の住所と宛名。

去2年よりもはるかにうまくいきそうです。ずっと良い人々と仕事ができます。私は、地図やレポート(蝦夷地調査に関する 著者注)を無償で仕上げるまで、弟子達と働き、指導を続けることを申し出ました。契約が終わった時、すばらしい贈物が送られて来ましたが、断固拒否しました。全く愛想をつかしていたので、内務省のプロジェクトの申し出には大へん驚きました。開拓使の仕事は約6週間で終わります。昨日新たに契約することにはほぼ決まったことを告げた時、弟子達の感謝の気持ちのあらわれの微笑は、とてもチャーミングでした。彼等と私との快い個人的な関係はさておき、内務省への転任(彼等の場合は4年)や、フルタイムの地質の仕事が保証されていること、それに蝦夷よりずっと良い土地で働けるのを、彼等は好条件と思っています。

開拓使契約満期前後のながい経験、年が明けての父サミュエル・ライマンの死去、不安定な将来等、暗黒の日々が続いたので、数ヶ月手紙を書かなかったのは当然であろう。内務省の仕事はトンネル脱出とみてよく、手紙の隅々にまで喜びが満ち溢れている。またライマンの日本への愛着が強く感じられる。ライマンは来日2ヶ月余りで未開地蝦夷へ入り、5ヶ月間の想像を絶する困難な踏査をし、弟子達と辛苦を共にした。つらい経験を通して新しい日本を知った。若い人々が西洋技術を速やかに獲得し、日本を近代国家にしようとする燃え立つ情熱に感動した。森鷗外が反駁せずにいられなかったエドモンド・ナウマンのネガティブな日本観でなく、ピエル・ロテイの鹿鳴館の日本でもなく、日々の体験から学んだ生き生きとした日本をライマンは愛したのだ。

同書簡に開拓使の役人とのトラブルの原因を次の様に述べている。「役人とのトラブルは、彼等の親切心や礼儀の欠如、教育や文明(これは確かです)が欠けていること—これらは大したことはないのですが—(公に引用しないで下さい)、役人が運営や一般諸事の近代的、且つ、もっと進んだ方法を知らず(一部の高官は運営すら知りません)子供のようだからです。相手が子供や部下でしたら愛嬌があっているのですが、雇用者や同僚としては、しばしば不快な経験をさせられます。内務省で関係する人々は、開化的で運営を体得し、また将来に起る誤解を防ぐ

為、明白な契約をしてくれる様に思えます。」

6月5日、ライマンは越後油田調査に出発した。信州一ノ沢近くで落馬し、静養中2通の長い長い手紙を書いた。すなわち1876年6月21日と22日の手紙で、フィラデルフィア万国博覧会に出したレスリー一作蝦夷石油地質モデルから、開拓使、日本石炭の将来、転鏡儀注文、モンロー批判等次から次へと話題が展開し、一つ一つ興味深いが、最も注目を引くのは、ライマンの地質学会 Chishitsu Gikai の発案である。

一ノ沢 信州 日本
6月21日 1876

My dear Mr. Lesley,

—昨冬私がすぐ帰国するつもりでいた時、弟子達に地質学研究のための会を作るなら、私のささやかな鉱物コレクションと家具を提供すると申出ました。彼等は私の計画を喜び、新年の休みに会を作りました。会名は簡単に、The Geological Society (Chishitsu Gikai)で、科学の分野に於いて、著作ですでに名をあげた人々が会員になるあなたのお気に入りのいくつかの会のアイデアに基づいたものではなく、むしろ会員が自分達、また恐らく世界のために、協力して何かやろうというアイデアに基礎を置きました。けれども地質学に漠然とした関心を持っている人達を入会させないように、大変高いと思われる会費にしました(月50セントで当時の彼等の給与の20分の1です。[6月22日の手紙で月1ドル、彼等の月給の10分の1と訂正している。著者注])。過去数ヶ月仕事に追まわられていたので(例えば毎日9時間から10時間の非常に骨の折れるオフィスワークが数週間続きました)、彼等の会の仕事にかまう暇がありませんでした。会が、メンバーの地質の知識を増進するだけでなく、将来散逸した日本の鉱物や地質のインフォメーションを集めて出版する機関となるように望んでいます。勿論鉱物コレクションと共に、図書も集め始めました。

ここまでは長い前置です。あなたの調査レポートが無料で配布されるなら、他の寄贈出版物と一緒に送っていただきたいです。若者達は優秀な人々です(私の意見では各人モンローの12倍の実力があります)。次回弟子達に会った時、あなたが近所へ行くように、我々の調査を見に、また弟子

達に会いに来ることが出来たらと思っていますと告げたら、彼等はどんなに喜ぶことでしょう。

ライマンの日本地質学会の夢が正式に誕生したのは、明治11年で、地質学社と名付け、“地質雑誌”を発刊した。

工部省は中央政府機関だけに、近代的なしかも進歩した運営法を知っている人が多かったからであろうか、ライマンとの関係はスムーズであった。ライマンと黒田清隆および開拓使の対立は、主に東西の発想・思考のちがいが強調されるけれども、サムライよりも成上り者や権力・富を追う者が開拓使を占めていたのも、一つの原因ではなかったろうか？内務省に移ってから、ライマンが日々折衝した大鳥圭介は広い知識を持ち、雅量があり、良心的で今日で言えば真の国際人であったと思う。しかしライマンと工部省の間のトラブルは皆無ではなかった。

江戸 日本
3月20日 1879

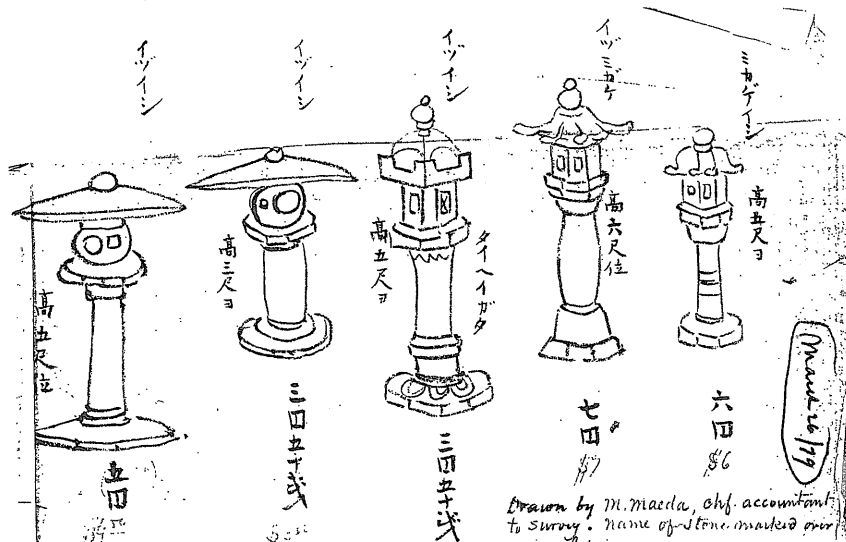
My dear Mr. Lesley

—私の短い年報から多分理解されたことと思えますが、日本油田採掘はその土地の人々に利益はあっても、概して会社にはあまり儲けにならず(彼等の側は50パーセント高くつきます)、政府にとっても長期的には有利ではありません。それにもかかわらず政府は当初から石油採掘を期待していました。私は昨夏までこの件をさけていました。我々が、油田の地質構造のテストに必要なことしかやらないことを、政府は十分に了解したと思っていました。我々が石油掘削をする必要はないとどんなに忠告しても、彼等は自分達の利益のために、掘削したくてたまらなかったのです。さて昨秋、私が越後を立てて調査の旅を続けていた時、政府は私から主権を奪い、私の第一弟子に勧告文を書かせて、3つの油井を掘らせました。彼は私の掘削説明書を見て、私が是認したと単純に信じて行なったのです。有無を言わず政府の命令で書かせられた説明書に添えて、私はプランに反対する抗議文を政府に送りました。政府は工部卿と十分に検討し相談してから、説明書を弟子達に渡すことを約束しました。卿と天皇越後行幸に同行し、弟子達と相談して、私に反対し第一弟子に勧告文を書かせたのです。これ自体欧米では重大な事と考えられますし、また私が調査の首席で

はないと考えている証拠です。しかし開拓使でめちゃくちゃな仕事になされた経験から、ここでは書面上の契約によってのみ働いてきました。政府と弟子とのコミュニケーションは決して直接でなく、間接的に文書でなされました。10月に彼等が掘削したことを知った時、烈火の如く怒り、解約後は恐らく閑居してレポートを書かねばなりません、もし得心がゆく様な説明が出来ないなら、すぐ契約を破棄したいと書き送りました。私は郵便設備のない不便な奥地にいたので、交通は遅々として進まず、1,2通の手紙の交かんをしただけでした。勿論政府の手紙は、ごまかし、虚偽、横柄な言葉で一杯でした。私の帰宅前に真相がはっきりしたので、旅は修了しましたが、前案によって契約解除を宣言せねばなりませんでした。私の提言により、1月末にすでに石油の掘削の項は削除してもらいました。帰宅した時には(1879年2月3日)両者共個人的な悪感情を表にあらわしませんでした、私は10日間出向かなかったもので、私が全く自由の身であると思っているとみたようです。そこへ工部卿官邸屋さんの招待があり親切な持て成しに与りました。昼食後、卿は誤りを認めましたが、去年の7月長い英国滞在から帰り、工部卿に任命された後すぐ越後へ出発したので、私の契約条件の特殊性を知らなかったと弁解しました。勿論条項は、欧米人の目で



第3図 ライマン邸の庭の手入れをしている植木職人が書いたスケッチ。



第4図 地質調査会計長前田Mが描いた石とらうろ。

は、明確に説明しなくとも、理解できるように書かれていました。しかし私は、もめ事を続けないで、今の契約を終えるのもっともらしい理由が出来たのを嬉しく思いましたし、卿の言い訳の素因・誠実・真実を厳密に問いたたくはありませんでした。この様な事件後、再び将来の契約をするとは殆ど考えられませんし、日本側は、はっきりとそれを望んでいません。彼等は金銭以外の約束に全く留意しません。私は卿の誠実について疑っています(疑わしいという評判があります)。それでも言語道断な出来事が起こらない限り、ここに留まって自適の生活をしながら、リポートを書き上げ、言語の勉強に励みます。1年は帰れそうにありません。(以下略)

1879年のフィールドブックを見ると、「2月14日、工部卿ミスター井上の官邸昼餐にジェネラル大島と共に呼ばれた。昼餐後、卿は昨秋の掘削についてのYの勧告文をとりあげ、私との契約を破った件につき、大変親切に説明された。私は最早解約出来ぬ」とある。井上は井上馨、Yは山内徳三郎実際に井上馨の工部卿の任命は7月29日で、明治天皇越後行幸が8月であったから、彼の弁解は真実に近いと思う。それよりも私の興味は、井上馨が、エドモンド・ナウマンが3ヶ月後に東京大学を辞し、内務省地理局地質課に入り、新しく全国地質調査を行なうことを、すでに知っていたかどうか

にある。

ライマン書簡コピー綴りの中に、ナウマンへの手紙があるし、ナウマンはライマンが越後油田調査出発前挨拶に訪れた人々の一人であった事からも、ナウマンとは顔見知り以上の間柄だったのではないだろうか？ 次の手紙は日本地質調査の指導権がナウマンに移ったニュースをライマンが如何に受け取ったかを知る好資料と言えよう。

江戸 日本

5月30日 1879

My dear Mr. Lesley,

——私は久しく給料生活から金利生活者として暮す夢を描いていました。しかし仕事はたくさんあるのですが、この生活は棚に納められた感じで、あまり面白くないのではないかと懸念し始めました。もし私にピッタリ向く仕事があるのを聞いたなら教えて下さい。それを聞くだけでも、庭園や家の手入れを楽しんでいる安逸な生活から脱する助けとなるでしょう。今頃はゆったりと仕事をしていると思っていましたが、結局大差ありません。今月の初めから報酬なしの、のんびりした日を送っています。ドクター ナウマンが私を追い掛けているらしいとのニュース以外は！ 4月の初めドイツ新聞 Reichsanzeige に出ていました(ニュースは2月の初め日本から送られたに違いありません)。今後日本の資源開発をやるのはド

イツ人達で、ドクター ナウマンが15年間地質鉱物調査を行なうことになります。日本人は彼のプロポーザルは、未だに公に決定していませんと言いますが、大体は同意されているのを認めています。私は再契約を期待も望みもしていませんので、彼の契約は直接そんなに影響しませんが、私への欺まんと思います。私の弟子達に対しては絶対に不公平で、初心者を利用するような新しい組織では全く無視されています。弟子達は私よりずっとこの件に関心を持っています。7月末私の契約が満期になるまで法律的に解雇出来ません。私が視察した鉱山、跋涉した各地、油田調査のレポートを書くのはとても時間がかかります。その地図制作はもっと時間がかかります。ドクター ナウマンが期待する、より詳細で慎重で徹底的な調査は、勿論我々のレポートの出版に先んずる程早くは進まないでしょう。それどころか、彼が同じ土地を調査する頃は、私の概括的な踏査は、すっかり古びてしまっているはずです。踏査は最初意図されたように、念入りな調査に際して役立つガイドとなるものです。私は将来の仕事は弟子達によってなされるのを期待していました。彼等は外国の援助なしに、必要な仕事が出来ますし、経験を積んで次第に腕を磨いていくことでしょう。けれども今私は少なくとも地質の仕事に関する限り遠ざかっていようと思っています。生活は、私とドクター ナウマンおよび彼の友達の不愉快な関係で、だんだん楽しくなくなっています。彼を知っている私の1,2の親友は、彼のふるまいは不快だと言っています。もし彼がこの事実を知ったら、彼の友達とともに私に対しても悪感情を持つでしょうし、私が留まってお節介や邪魔をすると思うでしょう。不快でひどい非難は実際に一年前から始まりました。私の仕事が好意的に扱われな

いで、批判的なもの言いは、どんなものでもがまんが出来ません。誰もがやれるのんびりした無報酬の仕事とっていましたが、この様な状態の下では、あまり楽しくなくなりました。しかし報告書の作成・印刷をせずに多くをそのまましておくのは、残念に思います。日本や中国でやるのもって来いの研究はさておき、来春まではここにいるべきです。

ライマンはレスリーへ不満をさらけ出して、幾らか心の痛手をいやしたであろうか？ そうであったことを私は願ってやまない。彼は1880年の春でなく、12月22日まで日本に滞在し、皆に惜しまれて離日した。

レスリーへの手紙は1895年まで続いた。その中には、アメリカを訪れた弟子の世話や言葉が通じないため起こったトラブルの解決を頼む手紙もある。

ピーター レスリーは研ぎ澄まされた神経を持ち、一つの間違ひさえ見逃せぬ完全主義者で、博学多識そして誰にでも惜しげなく援助を与えた。一方、彼はエネルギーを使い果たすと深い深いメランコリーに陥った。

その度にヨーロッパに旅し新たに充電し、再び超人的な活躍をしたが、1893年、あまりの重責、過剰な仕事に耐えかね最早メランコリーの淵から這い上がることは出来なかった。文通は1895年で途絶えた。しかし毎日曜日午後1時きっかり、トク(中嶋徳松 馬丁の子 著者注)と連れ立って、フィラデルフィアのレスリー邸で昼食をとるライマンの習慣はその後も続いた。

FUKUMI Yasuko (1992): A note on Lyman (7) —
J. P. Lesley (2).

〈受付：1991年10月31日〉